くにみ

【第11号】
昭和33年7月15日発行
非売品
発行所　国見町公民館
発行人　佐藤善次郎
編集人　鈴木美一
印刷所　宇佐美印刷所

▲今月は町・県民税、国民健康保険税第二期の納期です。九月一日までに完納して下さい。

愛の鐘

町民の心に鳴らす

青少年よすなおに伸びよ

青少年の夜遊びを規正し、不良化を防止するために、大阪市婦人会が「みをつくしの鐘」をつくり、毎夜十時にならしたことにはじまった「愛の鐘」運動は、ついで大阪市近隣の都市に波及し、寺院・教会の鐘や工場のサイレン等を利用し、効果をあげている。その後この運動は全国的に拡まり、わが伊達管内でも隣の桑折町では三十数万円をかけてオルゴールを設備し、八月一日より夕方六時と夜十時に妙なる調べを奏でている。梁川町ではサイレンを鳴らしているようである。わが国見町では鐘や太鼓こそ鳴らさぬが、青少年愛護運動の実践においては決して他に劣らぬものがある。今その事例の二三を紹介する。

相撲愛好会の美挙

【その一】

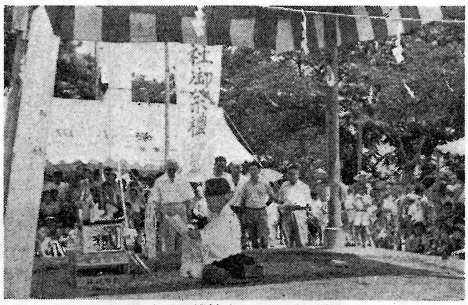
土俵つくって道場開きに相撲大会

旧藤田町には以前相撲熱が盛んで、県を代表して国体にまで出場した歴史もある。今の壮年層の人々は大ていまわしをしめて土俵をふんでいるのであるが、青少年を善導するには相撲を復興するに限ると同志相はかり、私財を出し合って観月台公園に立派な土俵を築き毎日毎晩当番をきめて小中学生や青年達に技術指導を通して精神訓練をしている。三日の土俵開き相撲大会には元立教大学の相撲部主将田中氏を桑折町より招き、又学法福工選手八島俊夫、吉田登両君、共に当町出身）の特別出場を得て模範試合並に実技指導をしてもらった。尚当日は小学三四年、五六年、中学生及び一般の四部にわけてそれぞれ個人試合、三人抜、五人抜などをし、町内から寄附された山の賞品でみんな大喜び、見物人も小中学生はもちろん、大人の人々も黒山のように集まり、本物よりもおもしろいと大人気であった。

尚これらの人々の献身的なはたらきに感激した町内有志たちは黙視するにしのびず、われもわれもと浄財を寄附したため一時心配された五万余円の経費も片付き一同感謝の念をもって今後の努力を誓い合っている。

【その二】

青年研修所いよいよ着工



（写真は相撲協会の土俵開き風景）

青年団の熱意俄然爆発

新町村建設計画の実行に当り次代を担う青年の養成こそあらゆる施策に先立つものであるとの観点から、青年修の自主的研修の殿堂を建設することになつたことは前号までにお知らせした通りであるがいよいよ之が工事開始となるや町内五〇〇名の青年団員は今こそわれらの研修所はわれらの手での意気込で、割当の日割もどかしとばかり出動して、抜根、整地、道路作りなどの作業に奉仕した。……若人よ、すなおに伸びよとのねがいをこめて打ちならす愛の鐘をきいて立ち上った青年の手によって国見町は一人の不良もない理想郷となることであろう。

【その三】

老若相携えて南蔵王を踏破

夏になると、山や海に出かけるものが多くなり、中には健全な体育レクレーションの域をこえて世間の非難をうけるものもある。わが国見町公民館では、ほんとに楽しく為になる登山というものを認識してもらうために、体育部指導の下に毎年登山を実施してきたが、今年も町内一般に呼びかけて希望者を募り、七月十九・二十の両日にわたり蔵王登山を実施した。参加するもの四十五名の多数で、上は七十余才の菅野文吾氏から下は十六才の高校生、或は五十余才のおばあちゃんから成人式前後のむすめなど、文字通りの老若男女の団体だ。それが蔵王山小屋四階のザコ寝からものすごいあらしの南蔵王連峰踏破など、佐藤団長、小畑リーダーを中心に一糸みだれぬ行動をし、最小の経費をもって最大の効果をあげ得たのである。中でも五六十才の大先輩が若い者の陣頭に立つで終始りつぱな模範を示されたことは一同頭のさがる思いであり、これによって青年たちは登山というものに対する認識を新たにしたことであろう。

勤務評定について

勤務評定と云うことは今さらさわぐべき問題でないと思います。すべては法によって行われていることで、福島県では四月三十日に実施が決定されすでに進行中のことになっています。進行しているために少しも教育的に困ったことが起ってもいませんし、起るわけもないのです。どこの社会でも必要なこととして行われていることが福島県の教育界でも今年から法的にできるだけ正確を期して行われるだけのことです。いわば今までよりも合理的に行われることであり、どなたにも少しも迷惑の及ぶことはありません。

国見方部教育委員会、国見方部校長会も勿論法の精神にしたがつて実施にふみ出していますし、先生方も御理解下さつて、お子さま方の教育に精励して下さっていますから御安心のほどをねがいます。

国見町教育委員会
組合教育委員会

家庭と社会

平井　博

青少年不良化の問題は、その発生の原因も対象の考察もいろいろの観点からなされ得るものなのであろうが、一応この際、これを家庭の立場からと社会の立場からの二つの場に限って考えて見よう。

愛情の不足　人間という動物は、いわゆる生物のうちで最も高度に発達し、最高の能力を持っているものであるがそのことは決して強健とか雄大とかを意味しない。実は人間ほどデリケートな肉体的、精神的弱さを持っている動物はないのである。人とは何かを愛しまたは何かによって愛されていると意識なしには、まともに生きていくという意欲や能力を持ち得ないほどか弱い動物なのである。しかもその度合いは壮年者より青少年になるにつれて強くなる。自分は何者によっても愛されていないという孤独感ほど青少年を悪の道に追いこむ刺戦はないのである。それは決して物質的な意味には限らない。むしろ物として何一つ与えられなくとも心の愛情一つで子供は充分に温め得るものである。

愛情の過多　これが物的にのみ注がれたときに起る逆効果がこの愛情の過多である。しかし愛情の過多の多くは形の上だけで、実はこれは極端な愛情の貧困の変形に他ならない。子供に一ヶ月五万円の小遣銭を与えて、親はその何倍かの遊蕩費を使っているような家から太陽族の子供が出ることは必然であろう。

また精神的な面でも、子供はいつまでも子供として一から十まで干渉して、子供に反抗心をかきたたせるまでになっているのも、精神的に五万円の小遣をやっているのに何等変らない。子供に責任をもたせて自ら計画的に行動させなくては子供はまともな子供にならないし、子供の反抗は時として子どもの自律の要求と親の圧迫との間から出る摩擦音と見られるべきものさえ少くない。

世代のずれ　親の尺度は常に過去の規範からのみ出てくる。時としてその規範の価値体系が崩壊した後においてさえその尺度は墨守される傾きがある。親が常に親の立場にいるものはあり得ない。親の理知と経験をもって子供の立場に立ってみてこそ初めて親の価値が生れてくるものである。子供の反抗を憤り、頭から反抗そのものを否定することは禁物である。社会は反抗によって今日の進歩して来た歴史的事実を一考する要がある。幕府に反抗するものがなかったら今日も徳川時代であったろう。反抗は子供の基本的徳目の一つなのだ。要は何に反抗するか、いかに反抗するかを授けるのが世の教育というものなのである。親の意見に全面的に一致する子供など、決して有為の人物にはなれない。

次に青少年の不良化問題を社会の面からながめて見ることにする。

悪環境の除去　ということは何人も考えざるを得ない点である。

青少年問題は実は青少年が不良化したために起っている問題ではなく、全く社会が不良化した為に起っている問題である。これは学校における道徳教育のみでは治療出来ない。じん麻しんにこう薬をはって治癒を期待する愚かさに似たことだ。大人の世界が清浄潔白であれば子供だけが不良化せるものではない。貧乏追放」のモットーによって社会から追放されつつあるのは「貧乏」そのものではなく、むしろ「貧乏人」なのだ。「貧乏人」に「罪人」という極印が打たれて刑務所のみが繁盛しているのが今日のわが国の実状である。この辺から根本的に治療してかからねば悪環境を除くことは困難なことはいうまでもない。

抵抗力　このことが容易ならぬことだということになれば、差し当りの急場をしのぐために一番必要なのは単に子供を悪から隔離することでは決してなく、むしろ悪に対する免疫のワクチン注射をして、悪に対する抵抗力をつけてやることでなければならない。今日われわれが育てなければならぬ子供は悪を知らぬ子でなく悪を知り、しかもそれに抵抗出来る子供なのだ。従って教育は悪をおそれるためのものでなく、悪を批判出来るためのものでなければならぬ。

訓練組織　子供に自律的訓練の必要なことはいうまでもないが、それは大人にとってさえ仲々困難なことである。従って何等かの組織による訓練を考えなければならぬ。家庭や学校はその一つの組織なのであるが、同時に何かの社会内のグループに参加させ、その内で責任を分担せしめる道が奨励されるべきである。肉体的にも親も家も学校もありながら実は精神的に浮浪児であるという子供をなくすることに今後の努力が払われなければならない。特に義務教育を終えて学校という訓練組織を離れた者について、自からが情熱を傾けてその義務と責任を果すべき役割が与えられるべきであろうし、それが一つの職場の場合にはそれが単なる労働の場のみに終らない様な考慮が最大の急務として取上げられるべきであろう。

（筆者は福大教授）

（おことわり）
本稿は県防犯協会の了解により「防犯新聞しゃくなげ」第六号より借用した。町民各位の御精読を願います。

宝の山を守ろう

国見町の山林行政に思う

わが町の山林面積は、北山入山両財産区共有林千五百町歩、民有林六百九十町歩であり、そのうち北山組合四百五十七町歩の四六パーセントは桑折町の持分です。しかしてこの二千町歩におよぶ広大な山林はほとんどはだか山になつて居りますが、その一部、百町歩ばかりを五年前に宮城県と賃貸契約を結び、宮城県ではこのはだか山にパル〇資源として赤松の植林をいたしました。この松は今すくすくと伸びつつあり、もう十年もたてば見事な松山となるでしょう。その契約内容は、四十年後に売却し、その代金を宮城県と本町で半分することになつております。その代金は現在の相場で安く見積つても一億円になるでしょうから国見町には五千万円入るわけです。宮城県では他から土地を借りて植林し、一切の手入れをしてさえ採算がとれるのです。これを国見町でやれば、もちろん多少の経費はかかるとしても一億円をつくり入るのです。これこそ宝の山と申すものでしょう。こうした宝の山をもちながら、一向に関心をもたず、その境界線さえどこであるか知らない人がたくさんあると思います。自分の田畑ならそれこそ気違いのようになつて一寸二寸の境界争いをしているのに、町の財産となればなぜこんなに冷淡なのでしょう。吾々町民はもっと勉強して共有財産というものに対する関心を深くすべきではないでしょうか。

戦後の農村の姿を見てもわかります。田畑だけの地主様は農地改革のあおりをくつているのに山林所有者は依然として大きな経済力をもっています。正に山林は宝です。幸にわが国見町では先輩がのこしてくれた大きな宝の山があります。この宝の山に手を加え、金をかけることによって効果を十倍、百倍にすることがわが国見町の農政であり、山林行政であると思います。国には林野庁や営林局があり県には農林部や林務課があつてそれぞれ山林行政部門が独立して国や県の財源に役立つております。国見町としても当然山林担当課を設け、田畑より広い山林の育成と活用を図り、積極的施策を講じ継続的年次計画をたて、たゆまぬ努力を打込んだなら、二十年、三十年の将来において数億数十億の蓄財となって町民のふところに返ってくることは灯をみるより明らかなところであります。それは個人も公共団体も同じこと、一朝一夕に大を成すものでもなければ、棚からぼたもちがおちてくるものでもないことは歴史が物語っております。この宝の山と一千五百町歩の田畑とを結び合せた農政こそ新町建設、農村振興の基盤であると信じます。【斎藤喜一記】

【写真は】水晶森にある取得記念碑と造林を待つ裸山

馬鈴薯増収競技会成績

国見町馬鈴薯十傑

国見地区農業改良普推進員協議会（会長八島福太郎氏）では昭和三十三年度馬鈴薯増収競技会を開きこの度坪掘をしてその審査をした。その成績次の通り。（数字は反当貫数）

1、一（〇七）佐藤喜一　森山
2、九九二　熊坂吉兵工　内谷
3、九四一　佐藤英治　西大枝
4、九三二　佐藤清蔵　徳江
5、八七五　宍戸新五郎　徳江
6、八四二　落田鈴一　仝
7、八三三　木村栄四郎　内谷
8、七七一　八巻秀雄　徳江
9、七七四　村上太一　仝
10、七五八　斎藤勘十郎　石母田

夏休みを楽しく
盛り沢山な各校行事

夏休は子どもたちを暑さから護り、一学期の学校生活の疲れを休めるという消極的面と進んで暑さに負けない鍛錬をしたり、社会性を養い趣味を深め、研究心を高めるなどの積極的な教育的価値が考えられる。従って各学校やPTAでもいろいろと計画を立てて夏休をより楽しく、有効に活用するよう実施している。

◎藤田小学校

○七月三十一日四年生以上の児童二百名三台のバスに分乗して荒浜海岸に海浜採集会をする。

【写真は海水浴風景】

○八月四日四年生以上六十名で土湯峠鬼面山方面へ植物採集会に行く

○八月五日四年生以上の希望者を集めて星の観察をする

○八月十一日全学年で図画教室を開く

尚十四の部落子ども会ではそれぞれ緑蔭子ども会や見学、共同学習などの計画を立て、補導委員の援助の下にそれぞれ実行中である。

◎県北中学校

○七月二十一日から二十六日にかけて中体連行事の野球・水泳・競技・卓球などに出場

○七月三十日から八月一日まで二年生二百二十七名が参加して松川浦で臨海学校

○八月三・四・五日山岳部十五名で吾妻登山

○八月四日から十四日まで十一日間三年生中の進学希望者に学力補充指導

尚内谷部落生徒会三十九名ではサイクリング実施

◎小坂小学校

○七月二十六日四年生以上の校内球技大会を開く。男ソフトボール、女ドッチボール

尚十の部落子ども会は部落担当の先生、児童委員、PTA委員などの援助のもとに子供会を開く。

◎大木戸中学校

○三学年生に対し、期間中三日づつ三回にわたって学力充実の学習指導をする

○部落生徒会ではそれぞれ奉仕活動、共同学習、キャンプ、幻灯会などをする

先生方もまけずに研修

常に生徒の指導に精一ぱいの努力をつづけている先生方にとって長期休業は研修の書入どきである。各校共先生方の個人研究や共同研究の計画をもつて多彩な研修をしているが、特に常にはなかなかできない視察旅行にでかけたことは今年の特色であるようである。

◎小坂小学校の先生方は八月三日から九日にかけて名古屋、伊勢、奈良、大阪、京都など関西地方視察

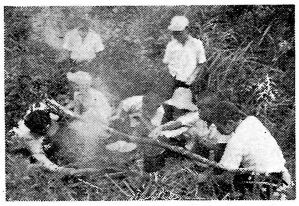
◎大木戸小学校の先生方九人は七月二十七日から三十一日にかけて富士五湖から十国峠、箱根、鎌倉方面視察

◎大木戸中学校の先生方は八月三日から八日まで博覧会ににぎわう北海道の札幌定山渓、登別、洞爺湖、函館等を見、帰途十和田国立公園を探勝して帰る

小学生のキャンプ
大木戸・森江野両校の交歓会

真夏の太陽が照りつける八月三日から五迄の三日間、大木戸、森江野小学校六年生百名の交歓キャンプを、水も山も木も素晴しくきれいな、しかもどこか神秘的な感じさえする貝田四つ穴で開いた。現地に着くとすぐ開会式を行い、国旗掲揚と共に両校の校旗も空になびいた。

総リーダー（吉原・多勢教諭）からは「これから三日間、心、添、控（垂道の方でいう）の立場を守りながら、知らない友だち同志が、お互の人格を尊重し、協力し合って生活しなくてはならない。誰れが欠けてもグループでの生活には支障を来たすこと」の話があり夢にまで見ているキャンプが始つた。



（写真は朝餉の支度にいそしむキャンプ風景）

日が沈み夕やみ迫るころから、キャンプファイヤーに火がともされる。選ばれたファイヤーキーパーになったO、Y両君は「われわれの一つになった心の火を最後まで消さぬように……」と、玉の様な汗を流して火を見守る中に、団結、組織、愛情の言葉が生れていく。やがて「一日の終り」の歌と共に火がおとされキャンパーたちは、それぞれのテントに帰る。

朝の小ハイキングにザラムキの山頂をきわめ、小運動会で汗を流し、午睡ではなつかしい父母の夢を見た事であろう。

三日目の朝が来た。予定した最後の日である。いつもより朝食を早くすまし、荷物の整理にかかる。三日間世話になったテントをはずし、かまど、便所、ゴミ捨場はこわされ今までキャンプをした所とは思われぬくらい美しく整美された。「せっかく友だちになったのになア」と、子供たちは互に別れを惜んでいる。

閉会式で「螢の光」が歌われた。「ああキャンプは終つた」とどの子供たちの顔にも深緑に染めた山が迫り、沢の水も清く澄んで静かだった。本当に厳粛な別れの一時だつた。

キャンプに参加して学びとつた事は一人一人の胸中にしつかり納つているだろう。必ずや有意義であつたことを誓い、重いリックを背に四つ穴を下つた。三日間ではあつたが再び見る父母の地は美しかった。

☆　☆　☆

○四日には春日教育長さんも山に登つてこられ、一層この催しに花を添えた。

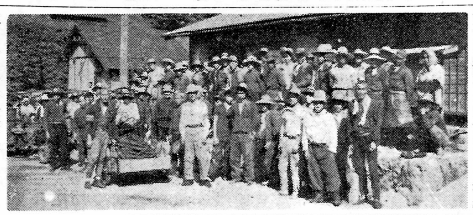
○両校PTAの協力に対して深く感謝の意を表したい。

（大木戸校多勢記）

徹底した部落共同防除
貝田病虫害防除班の活動

米の増収をはば む最大の敵二化螟虫の特効薬有機燐製剤は知事の指定した団体のみが使用できる事になつている。昭和二十八年他部落がまだ団体の共同防除など実施せぬ時いち早く共同の力で完全に病害虫の被害をくい止め、以来益々その組織を固め、年々共同防除を徹底してその効果を示して来た貝田共同防除班は他の模範とされている。七月のある日その活動状況を見せていただいたのでその一端を紹介する。

農家戸数一〇一戸、水田耕作面積三一町歩、これに対し動力噴霧機一三台ある。指導陣として、防除班長（貝田部落長）を中心に農協、農業改良推進員、副部落長が当り、四～五班に分れ責任担任者が指揮をとる。こうして共同で防除することにより年々害虫やイモチなどが少くなり、早植をするおかげで反当収量も一～二割は向上している。経費の面でも二～三割の節約ができ、手のない者や機械をもたない者までそのおかげをうけることができるのでみんな大喜びで、隣保相扶、共同融和の美風が生れつつあるという。



【写真はイザ出動と勢揃いした防除班】

社会教育指導態勢成る
公民館主事など委嘱

国見町教育委員会では町の社会教育を担当するため公民館主事及び青年学級婦人学級の主事を左の通り委嘱した。

○国見町公民館主事（カッコ本職名）

菅野　貞雄（小坂小校長）
古宮佐源治（藤田全）
松浦　隆夫（森江野全）
佐藤　勝弥（大木戸中全）
原田　久義（大枝小全）
蔭山　亮心（県北中全）
臼田　源吾（大枝中全）

○青年学級主事

小坂青年学級主事熊坂修一
藤田全　後藤　保
森江野全　牧野武夫
大木戸全　高橋伊蔵
大枝全　未　定

○婦人学級主事

小坂婦人学級主事三木ジュン
藤田全　鈴木キチ
森江野全　未　定
大木戸全　赤塚　忠
大枝全　未　定

球技大会に町長栖

国見連合青年団では八月十日県北中グランドで町公民館後援の下に連青発足五周年球技大会を開いた。その成績左の通り。

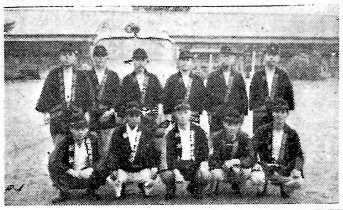
△野球（男子）
一位　森江野チーム
二位　大枝チーム
三位　藤田チーム
△排球（女子）
一位　大枝チーム四戦全勝
二位　森江野チーム三勝一敗
三位　藤田チーム二勝二敗
尚優勝チームには町長寄贈の楯及びカップが授与された。

消防団の偉容高まる
可搬式小型動力ポンプ三台購入
1台33万円

国見町消防団では昨年度からポンプの設備に重点をおき町当局に要請中のところ、七月中旬、国家消防本部の補助も決定になつたので、小型動力ポンプ三台を購入し、これを第一分団第一部（泉田）同第三部（鳥取）第四分団第二部（川内）にそれぞれ配置し、無ポンプ消防団の汚名を返上した。しかし何といつても火防上の要訣は一戸一戸の用心にある。ポンプ百より用心一つ。ポンプ充実と共に尚一層町民各位の火防精神の高揚を促したい。

尚参考までに今回購入したポンプの性能を左に御披露します。

○名称　トーハツポンプVK－二型
○国家消防本部検定B二級
○吐出圧　一〇三～一五〇ポンド
○吐出量　二〇〇～三七〇ガロン
○重量　九五キロ（約二五貫）
○吸上げ高さ　二八尺



今年は一チーム優勝

断然頭角をあらわす国見町消防団

第四回福島県消防ポンプ操法競技大会伊達郡予選会は、去る七月十三日保原中学校グランドで開催、郡下十四チーム参加、日頃の腕を競い合つた。絶対的強味をもつわが国見町消防団チームは、消防ポンプ自動車部、小型動力の部共に優勝して並居る観覧者や審査員をおどろかせた。尚今回の出場選手は第二分団（藤田）と第四分団（大木戸）で、来る本月二十六日郡山市開成山の県営郡山競技場で開かれる県大会に郡を代表して出場することになつているが、今からその活躍ぶりが期待されている。

当日の成績左の通り

○消防ポンプ自動車の部

第一位　国見町　一五二点
第二位　保原町　一五〇点
第三位　梁川町　一五〇点

○小型動力ポンプの部

第一位　国見町　一五六点
第二位　霊山町　一五五点
第三位　月舘町　一四〇点

農事メモ

◇水稲

◎葉いもち病防除のキメ手は早期発見と早期防除です。

◎穂首いもち病は時期を失して病班が出来てからは手遅です。

穂ばらみ末期と出穂期の二回に撒布して予防することが必要です。

※出穂期は品種によつて異様にしましよう。

集団的防除を行はないと効果が少ない。

◎予報では穂首いもち病の発生が多いので防除に万全を期すこと。

◎水銀粉剤が若し桑にかゝると十四日間の残効期間があるから実施する場合は充分注意すること。

◎白葉枯病の発生田は朝露があるうちは入らない様にし、いもち病に準じて水銀剤を撒布すること。

◎穂ばらみから出穂開花の時期は水を豊富に必要とするので水不足のない様にすること。

◇秋まき蔬菜

◎白菜

1、適品種（普通栽培用）
松島純二号、松島新二号
松島交配七号、長岡交配一号、松島交配一号等

2、播種期
早まきすると病害が多発するので適期にまくこと八月二十日を中心におそくとも二十五日迄は終ること。

※旱天続きも予想されるので練床育苗も考えること

3、肥料
施肥量が少いと結球しないあるうちは入らない様成育をよくすること。
反当り施肥成分量
N（窒素）六～七貫
P（燐酸）三～四貫
K（加里）六貫

4、管理
播種して覆土後にBHC粉剤を撒布して初期の害虫を防除すること。
間引の手おくれは初期の成育を遅らせるから葉の触れ合はない様にして行くこと。
中耕は余り遅くまですると根を切つて腐敗病の感染を導くからおくれない様にすること。
病害虫防除の徹底

青年団体指導者講習会

県青協並に県教委主催青年団体指導者講習会は七月二十二日より三日間婦人会館で行われ当町からは左記三名出席。八島博正（国見連青団長）佐久間奉雄（森江野団長）玉手ミン（国見連青家政部長）

婦人指導者講習会

県教委事務局主催婦人指導者講習会は七月十、十一日の両日、飯坂町県婦人会館で行われた。当町からは左記の通り出席。

高橋八重子（小坂）城田キヨ（藤田）松浦フク（森江野）
八島アキ（大木戸）井砂マチヨ（大枝）

世は正にスピード時代

近頃国見町にも大分オートバイが入つたようだが、役場の税務課の話によると

各種自動二輪車計一六七台
自動耕運機　一〇一台
リヤカー　約一二〇〇台
自転車　約一六〇〇台

即ちオートバイは八〇人に一台、自転車は五人に一台の割である。アメリカでは二人に一台の自動車があるとのことであります。